

ふくべ せつこ
福辺 節子さん 55

顔



撮影・大西健次

って手前に引く。相手が立ち上がろうとしてひざに力を入れた瞬間に手を支えてあげると、机に手をつくような感じで、自分の腕の力も利用してフワリと立ち上がれるという。

「寝たきりの人でも動く力がある。その力を適切な方向へ導くだけでいい」と極意を説く。

21歳、大学3年の時に交通事故で左脚のひざから下を切断した。リハビリ中に理学療法士という職業を知り、介助の道へ。義足では踏ん張りがきかない。

そのハンデが独自の介助術を生み出す原動力になった。

力任せの介助では相手も痛みや恐怖を感じる。「正しい介助術の広がりが見え、介助する側、される側双方を幸せにする」と訴える。

(社会部 細野直人)

寝たきりの高齢者や障害者らを介護する苦勞は、並大抵ではない。無理がたたり、介護者が体を痛めることも少なくない。

「負担を少しでも軽くしたい」との思いか

ら、10年以上前に力のかからない介助術を考案。これまでは地元・大阪で普及に努めてきたが、今春から全国でセミナーを開くようになった。

例えば、いすからの立ち上がり。相手の手のひらを下から握